≪何故、日本は戦ったのか？≫日清戦争前編

日本の危機感の最悪の根源は中共や韓国だけではない。最も深刻な根源は日本人の反日・侮蔑（ぶべつ）主義者達であり、中共信奉者達である。真の日本の敵は、実は日本人の中に居ることを、哀しいかな我々は重く認識することが必要である。日本には仏教や神道・儒教の影響で「正しいことは必ず報われる」とか「正義は必ず勝つ」などの思いが心の底に根付いていた。そこをアメリカは上手に利用し、「勝者＝正義」・「日本軍=悪人」というイメージを日本人の脳に叩き込む政策を行った（ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム「英語：War Guilt Information Program、略称：WGIP」。大東亜戦争終結後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）による日本占領政策の一環として行われた「戦争についての罪悪感を日本人の心に植えつけるための宣伝計画」）。東京裁判もその一例であった。日本人は、日本弱体化政策を完全に信じ、精神的に弱体化された精神衰弱者に変えられた。歪な国家観を持った政治家・学者・メディアに今日本は犯されている

。

安倍首相が戦後レジームからの脱却を主張するのは当然であろう。我々志雲会が目指す正しい歴史を学び、正しい歴史観・国家観を拡散する運動も戦後レジームからの脱却の一助となろう。常に我々はこの会の原点を忘れずこの運動を継続すべきである。将来、選挙権が１８歳になるとの事だが、私は危険視している。実施するならそれなりの教育プログラムがなされなければ国家観無き個人至上主義の愚民集団となり、国家の前途を狂わせる恐れがある。外国人の選挙権取得と共に注意を払う必要がある。

注）18 歳選挙権
平成 28 年 6 月 19 日に法制度が施行され、同年 6 月 26 日告示、同年 7 月 3 日投票の福岡県うきは市長選が日本初の 18 歳・19 歳選挙となった。国政では 7 月 10 日が投票日の第 24 回参議院議員通常選挙が初となり、衆議院議員総選挙としては、平成 29 年 10 月 22 日投票の第 48 回衆議院議員総選挙が初となった。

今、特攻とテロの区別が分からない人達、軍事=悪・愛国心＝軍国主義・日本国＝侵略国と思っている、東京裁判史観に洗脳された人達も多い。何故日本は日清・日露・大東亜戦争を戦わざるを得なかったのか知らない人、特に若者に多い。それ故、今回から日本が戦わざるを得なかった歴史について学んでいきたい。

その為には歴史を巻き戻し、元寇の役から始めなくてはなるまい。それは、朝鮮半島は常に昔も今も地政学的にも民族意識的にも日本国家に害を与え続ける存在だからである。今も韓国とは竹島の領土問題・慰安婦問題の歴史戦を抱えているのを考えても理解できるだろう。日本は半島のように大陸と地続きではなく、日本海という防壁で囲まれ、海峡を隔てた朝鮮半島がクッション役をつとめた。故に、中国大陸からの直接の侵略は

無かった。しかし１３世紀にヨーロッパ・中国・朝鮮を支配したモンゴルの「元」だけは半島の朝鮮に戦闘船を造らせ２度も攻め込んだ。即ち元寇の役である。鎌倉武士の必死の防衛戦と神風のお陰で侵略を防げたが、以来日本人は半島が「大陸の強国」の手に落ちる恐怖が日本人の潜在意識となって近代まで影響され、日清・日露等近代戦争の原因に大きく関連する事を基本知識として忘れてはならない。日本は開国以来、北の脅威（ロシア・清国）こそ日本近代史のテーマでもあり、それは現在の日本をとりまく環境においても変わっていない。

〈当時の世界状勢〉

欧米列強が世界中で利権獲得に槁（しのぎ）を削っていた「帝国主義時代」であった。資源や清国での利権を廻って争い、アジア各国は植民地化され、朝鮮は自立できず清国に属国化され、その清国は自分達が世界文明の中心にいると錯覚し、他は野蛮人と軽ろんじながら、領土は侵害されていた。キリスト教を信じる欧米人は他の宗教を信じる者や有色人種は人間として扱わず、生存権も認めなかった。支那の公園では「犬と支那人は入るべからず」との看板を立て、有色人種を猿か奴隷としか認めない独善的な思想が世界を覆っていた。

嘗て、高杉晋作は上海で支那人が牛馬のように虐待・鞭打ちされる現場を見て、人種差別の激しさにショックを受けたと伝えられている。日本の先人達はこの事態に大いなる危機感を抱き、平安時代以来約７００年振りに天皇を核とする我が国の国体を取り戻し、難局に立ち向かい、第１２２代明治天皇は国の骨格となる五箇条の御誓文で政治方針を示され、教育勅語で国体の姿、在り方を道義国家と定め、その実現を国民と共に実践する事を世界に示し、近代国家として歩みはじめた。そして、ロシア・清国といった強大な「北の脅威」に直面しながら「富国強兵」で「力」を蓄え、自存自衛の為に「北の圧力」に対し戦いの歴史が始まるのである。

高杉 晋作

いま改めて日本を取り巻く国際環境を眺めると、露骨な海洋進出を目指す中共の脅威にさらされ、半島からは韓国から歴史戦を挑まれ、又北朝鮮からは拉致の被害を受け、ミサイル攻撃にさらされている。日清・日露の時代や大東亜戦争開戦時と、日本の危機はさして変わりはない状況に置かれている、にもかかわらず「集団的自衛権」の行使容認に「再び戦争できる国になる」と朝日新聞や左派の政治家は的外れな論議で日本人が戦ってきた歴史を全て否定する自虐史観を宣伝している。何故日本人は戦ったか理解せずして、日本の安全は守れはしまい。これからそれについて学んで行きたい。

日本は戦いを好む人種なのか、侵略国家なのか、我々は答えを出さなければならない。

☆ 明治元年（１８６８年）１２月
明治新政府の樹立の報告の為、国書を朝鮮政府に送るも受け取らず拒否される。その後も数度送るも拒否される。
理由・・・国書の中の「皇」「勅」の文字は宗主国の清の皇帝のみが使用できる。

☆ 明治４年７月２９日
日清修好条規締結
理由・・・朝鮮との国交が行き詰まった為、宗主国である清との国交を先に開く。
（外交使節の交換、領事の双方の駐在、裁判権、関税率等）

☆ 明治９年２月２６日
日朝修好条規締結
やっと李氏朝鮮との国交が始まる。

〈日本の立場と目的〉

日本は李朝の近代化と清からの独立を強く求めた。アジアが列強に食いものにされぬ為には朝・清と共に民族自立の強い協力関係が必要であり、同時にアジア植民地の解放に強い意志を抱いていた。両国に自立を呼びかけ、出来る限りの協力を惜しまなかった。又日本はアジアの為、貢献もした。しかし支那・朝鮮の為政者は己の私利私欲の為、欧米列強とロシアを引き入れて日本の政策を邪魔し、日本を敵視し、アジアを裏切った。清にも朝鮮にも国を思い改革運動を行った者も多く居たが、これらの国の為政者は弾圧を強め残忍な方法で虐殺した上、その近親者や協力者迄ことごとく処刑した。日朝修好規の第一款（かん）には「朝鮮は自主の国であり、日本と平等の権利を有する国家と認める・・・とあるが、清は属国として自立を認めておらず不服であり、これが日本と衝突する原因となって行く。

☆ 壬午（じんご）事変＝壬午の軍乱（明治１５年７月２３日）

高宗国王の妃、閔妃（びんぴ）政権が日本の軍人を教官として近代的軍の創設を計る。これに職を失った旧軍の兵士らが反発、市民を巻き込んで暴動を起こす。閔妃派の要人や日本人が殺害され、日本大使館は焼き討ちされた。閔妃は駐屯していた袁世凱（えんせいがい）のもとに逃げ込み、窮地を脱した。この乱の首謀者である義父の大院君は袁世凱によって天津に幽閉され、政権は閔妃に戻ったが、以後内政・外交の実権は清の代理人たる袁世凱の手に落ち、日朝修好条規の第一款の「自首の国、日本と同等の権利を有する国家と認める」は無効となった。

☆ 済物浦（さいもっぽ）条約締結

日本は軍艦４隻等を仁川に結集させ、高宗国王に謝罪や損害賠償、実行犯の処罰等を認めさせた。

☆ 甲申（こうしん）事変（明治１７年１２月４日）

李朝への清の干渉に対する反発と朝鮮の近代化を実行する為、金玉均・朴泳孝等の開化派（独立党）志士と日本兵が加わり、閔政権に対しクーデターを試みるが、清の軍に潰され失敗する。密告で事前に発覚し、開化派を幼児も含め惨殺し、清もこれに介入したのである。金玉均は日本に逃れる。

福沢諭吉は主宰する「時事新報」で「朝鮮独立党の処刑」を掲載し、その残虐性・野蛮性・前近代性を非難した。又社説で「脱亜論」を掲載し、日本にとって支那と朝鮮は悪友で障害だと断じた。日支関係・日韓関係に於いても、現代にも適用される極めて秀逸な提言であり、見習うべきである。福沢は両国に共に西欧列強からアジアを守る為の同志たり得ぬと失望感をもち、深い関係を持つべきでないと断じたのである。彼の先見性は見事に当たっている。

☆ 天津条約締結（明治１８年４月）

日本と清の間で結ばれた（伊藤博文―李鴻章）。両国とも朝鮮から撤兵し、今後出兵することがあれば互いに事前通告すること。派兵後は速やかに撤退し駐留はしない・・・を取り決めた。この条約は、日本は朝鮮を自主独立の国として守ろうとするものであった。ただ条約が朝鮮とでなく清国と締結されたのは、当時朝鮮が当事者能力を持っておらず、清国の属国のままだったことを示している。しかし、その後清国がこの条約に違反し日清戦争となる。一方朝鮮では、高宗国王がこの空間に乗じて日本でも清でもなくロシアと何度も秘密協定を結び、その力に頼ろうとし、この国特有の悪癖である「事大主義」で日・朝・清、三国の関係を複雑にし、緊張を高めたのである。とにかくこの国は日本にとっては好意も誠意も通じない、今も昔も厄介なお隣りである。

☆ 長崎事件（明治１９年８月１３日）

清の新鋭艦（定遠・鎮遠等４隻）長崎に入港。水兵達が上陸して乱暴狼藉を働いた。商店や公使館に乱入し、金品の強奪・巡査や軍人を大勢で袋叩き・婦女暴行。１４日長崎県の日下知事と清国領事の会談で清国は集団での水兵の上陸を禁止等協定したが、約束は守らないのが支那の四千年の伝統で、翌日には集団で上陸し残虐な事件を引き起こし、多数の死傷者を出した。　これで日本人の清国に対する不信と反感が強まった。

☆ 金玉均暗殺事件（明治２９年３月２８日）

１７年の甲申政変後、日本に逃れていた開化派の中心人物、金玉均が閔政権によって上海に誘い出され、暗殺された。亡骸は支那の軍艦で朝鮮に送られ、八つ裂きにされ生首が港にさらされた。清国の属国を６６３年以降１２３２年続けて来た朝鮮は支那の制度・習慣は全て受け入れ、国の運命は支那頼みであった。残虐さ迄、朝鮮は習慣として見習っていたのである。

金 玉均

日本も今、国の運命を米国と平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、日本の安全と生存を頼みにして恥としない護憲派は朝鮮と同じ属国思想であり、主権無き国家を容認しているに等しい。その他、重光葵駐支公使が右脚を失うなどテロ事件は多く発生したが、支那・朝鮮は今も昔も決して謝罪しないし、犯人を英雄として讃える。日本人とは精神構造が逆のようである。

☆ 東学党の乱発生（明治２７年５月）

新興宗教団体が歴史を動かす。清朝末期に西欧列強に対抗して乱を起こした白蓮教の義和団事件（拳匪の乱）や大平天国も同じだ。明治２７年２月農民が郡による徴税の仕方に反発した宗教一揆。金玉均がこの「農民の乱」に呼応するのを恐れ、福沢諭吉と親交があり、親日家であった彼を暗殺したのは逆効果であり、日本世論を煽り政府に強硬な対朝鮮政策を取る結果を生むに至った。この「宗教一揆」を起こしたのは新興宗教「東学」である。１８６０年崔済愚（ちぇじぇう）による、儒教や仏教・道教を合わせたような教義の宗教団体である。白蓮教と同じように西欧の文化に対抗する極めて排他的な宗教で農民達の支持を得て急速に広まった。そして「東学党」という政治結社まで生まれた。一揆が発展し「東学党」が全州を陥落するに至って、李氏政府には鎮圧するだけの力が無いので、半島に影響力を持つ清国に助けを求める。李鴻章は歩兵２０００人を派遣した。日本も天津条約に基づき出兵を両国に通告し公使館警備と在留邦人の保護の為に出兵する。しかしながら日清の出兵を恐れた「東学農民軍」は李朝政府と「和解」を結びさっさと解散した。振り上げた拳を振るえなくなった清は、日本に対し同時に撤兵しようと提案した。日本は提案を拒否、逆に共同で内政改革に当たる提案をした。日本は朝鮮が改革しない限りまた反乱が起きる。それまでは撤兵できないとの理由からだった。日本は朝鮮が「自立した近代国家」にならなければ、北の大国即ち清やロシアから日本は直接攻撃される恐怖感があった。それは元寇の恐怖のトラウマが脳裏にある歴史的体験から生じる安全保障上の理由からだった。

☆ 日清戦争宣戦布告（明治２７年８月１日）

さらに７月に入ると李朝政府に対し清軍の撤退を求める要求を行った上で２３日未明軍事行動に出て閔一族を追放し、高宗国王は父親の「大院君」に政務を委ねた。この「大院君」の委任という形で清軍を攻撃し、日清戦争の火ぶたが切られた。日本は明治維新により新しい国をつくり、政治家から軍人・兵士に至るまで、この美しい国を守りたいという固い決意を持っていた。半島から清を追い出さない限り日本はいつかその手に落ちる危機感を強く国民一人一人が共有していたのである。それ故小村寿太郎は戦争を避けるべく交渉を重ねた。しかし清は日本を侮って交渉に着かず、故に小村に国交断絶を通告、ついに８月１日両国は宣戦布告した。

☆ 下関講和条約調印（明治２８年４月１７日）

伊藤博文・陸奥宗光外相―李鴻章・李経方　で調印。

※ 日本海軍の旗艦「松島」４２１７ｔは清の旗艦「定遠」７２２０ｔを撃破。
清が１２,０００人の兵で固めた旅順要塞をほぼ同人数の第一師団が１１月２１日に攻撃し、その日に陥落させる。

この講和条約の第一条は日本の戦争の目的を明確にしている。

第一条　清国は朝鮮国が完全無欠なる独立自主の国であることを認める。独立自主を損害するような朝鮮国から清国に対する貢・献上・典礼等は永遠に廃止する。

上記の如く、日本の戦争の目的は、下関条約で先ず清の隷属を解き放って朝鮮を独立させることにあった。戦争という代償を払ってでも朝鮮がしっかりと自主独立する事がアジアの平和と安定に不可欠と日本は判断していた。ところが李朝の官僚はひたすら私利私欲に走り、党派の争いに明け暮れており、国民の幸福を願う指導者は皆無に等しかった。やがてロシア公使ウェーバーは閔妃一派を利用して朝鮮をロシアの勢力下に置く画策を成功させ朝鮮の独立の芽を摘み取ってしまった。朝鮮は独立の大義となる日清の講和条約の第一条を生かせず自ら独立を放棄したのである。この様な民族の思考様式・行動原理は我々日本人には理解し難いものであり、福沢諭吉の「脱亜論」は今後も日韓関係や日中関係に大いに役立つ事と思う。

私達の先人はあの帝国主義・植民地主義の厳しい世界の中で恐怖にさらされながら国を守る為のみに朝鮮や清国と必死に戦ったのである。只々国を守る為に必死だったのである。

次回は、西欧列強の横暴に耐え忍び国力増強に励む日本の姿を学ぶ。

平成２７年３月８日

志雲会塾長　有馬正能